

英語の冒険

一言語の命運

Yonekura Yoko

米倉 よう子

奈良教育大学英語教育講座(英語学)

[英語の冒険]

－ [言語の命運] －

奈良教育大学 英語教育講座（英語学） 米倉 よう子

国際語としての地位を確たるものとし、我が世を謳歌する英語。「英語帝国主義」と揶揄されながらも、ある程度の英語ができなければ、研究の世界ではスタートラインに立つことすらできない現実がある。

しかし、今でこそ我が物顔に振舞う英語にも、実は苦難と忍従の歴史があったとすればどうだろうか。英語相手に悪戦苦闘中の我々にも、この外国語に対して、多少は親しみが湧くというものである。この小冊子では紙幅の都合上、英語の辿った数奇な運命のほんの一部しか紹介できないが、ここはひとつ、その冒険話に耳を傾けてみよう。そうすることで、英語に興味が湧き、英語を学ぶ意欲が少しでも高まるのならば、それに越したことはない。

なお、本小冊子のタイトルは、Melvyn Bragg の *The Adventure of English: The Biography of a Language* (2004) から借用していることを、あらかじめお断りしておく。

1. 冒険の始まり

英語はもともとブリテン島の土着の言葉ではなく、先住民であるケルト民族を征服したゲルマン民族の母語である。ケルト民族をさっさとウェールズやコーンウォール等の辺境の地に押しやったゲルマン人たちは、同じゲルマン民族であるデーン人のバイキング被害にあいながらも、アルフレッド大王 (Alfred the Great, 849年－899年) という文武に優れた為政者を得たこともあり、ブリテン島に英語を根付かせていく。

この時代の英語は、現代英語とは全く異なった姿をしており、英語母語話者でも、専門的に英語史の勉強をした経験がなければとても読めまい。本学の英語科の学生でも、一度も目にせず卒業していく者がほとんどであるが、洋画好きであれば、『ベオウルフ(Beowulf)』という、2007年に公開されたアメリカ映画を観たことがあるかもしれない。この映画の原作は、アルフレッド大王の頃の英語で書かれた一大叙事詩『ベオウルフ』である。ただし、映画版は原作とはかなり人物設定が異なっている。

ともあれ、英語の冒険はこうして始まった。しかし試練の時は、確実に近づいていた。

2. 試練

英語にとっての災難は、アルフレッド大王の時代から下ること約2世紀の1066年、エドワード懺悔王(Edward the Confessor)の逝去とともにやって来た。「ノルマン征服(the Norman Conquest)」の名で知られる、懺悔王亡き後の後継者をめぐる権力闘争は、イングランドの政治的分水嶺となっただけでなく、英語を存亡の機に立たせることになる。

ノルマン征服の勝者ウィリアムは、1066年12月、イングランド王ウィリアム1世(William I)として戴冠するのだが、彼が土着の者ではなく、フランス・ノルマンディ地方出身のフランス語話者であったことが、英語の運命を大きく変えた。支配階級の人々の母語が英語ではなくフランス語になったのだから、支配者層が特に関わる分野、具体的には統治や軍隊、法体系、商業、宗教、文芸、あるいは技術職の領域には、大量のフランス語が入ってきた。英語の辞書を引くと、辞書によってはその語の語源が記されていることがある。「古期(あるいは中期)フランス語」と書かれている語は、ノルマン征服後のフランス語を話すイングランド王たちの統治時代以降に英語に持ち込まれたものである。たとえば、govern(統治する)、army(軍務)、judge(裁判官)、money(貨幣)、religion(宗教)、chant(詠唱する)、chisel(のみ)といった言葉は、すべてフランス語に由来している。

英語を話すのはもはや被支配階級に突き落とされた人々でしかなく、被支配階級の者が社会でのし上がるためには、支配階級言語であるフランス語を習得

する必要があった。次に引用するのは、スティーブン王（ウィリアム1世の孫にあたる）治世下のイングランドを舞台にした小説 *The Pillars of the Earth* からの一節である。キングズブリッジ大聖堂の助祭長という高い地位にある「ウォールラン(Waleran)」が、母語ではないフランス語を習得し、苦勞して出世してきたことが暗示されているが、当時の英語をとりまく状況をよく表していると言えよう。

“They were speaking Norman French, (…) the language of government; But something about Waleran’s accent was a little strange, and after a few moments Philip realized that Waleran had the inflections of one who had been brought up to speak English. That meant he was not a Norman aristocrat, but a native who had risen by his own efforts—like Philip.”

(Ken Follett, *The Pillars of the Earth*, p.116)

彼らは支配階級の言葉であるノルマン・フランス語で話していた。しかしウォールランのアクセントにはわずかに訛りがあった。しばらくしてフィリップは、それが英語を母語として育てられた者が持つ抑揚であることに気が付いた。ということは、彼はノルマン貴族の出ではなく、自力でここまで出世してきた土着の者ということだ—フィリップと同じように。[下線は筆者による]

2. 耐える英語

かくして下層民言語の地位に突き落とされた英語は、このまま滅び去る運命なのだろうか。いや、さにあらず。宮殿ではフランス語が君臨する国で、英語は庶民の言葉としてしたたかに生き延びていた。ただし、フランス語の影響を受け、その文法や語彙を大きく変容させながら。

まず文法面の変化を見てみよう。英語はゲルマン語の一種で、ドイツ語の親戚にあたる。ドイツ語は現在の英語よりもはるかに複雑な活用変化体系を持っている。たとえば英語の定冠詞 the にあたるドイツ語冠詞は、その後ろに来る名詞の数 (number, 単数か複数か)、文法的性 (gender, 男性詞か女性詞か中性詞か)、あるいは文中での文法的関係によって、複雑な活用変化を見せる。ド

イツ語の入門授業をとると、学生は、「男性詞は der, des, dem, den, 女性詞は die, der, der, die …」と必死に覚えなければならないのだが、ノルマン征服以前の英語も同じ状態で、冠詞だけでなく、名詞や動詞にも多くの活用形があった。しかしフランス語の影響(だけではないが…)を受け、古い英語のこうした複雑な活用変化形は姿を消していくのである。現在の英語にある動詞 3 人称単数現在の語尾 (いわゆる 3 単元の s) は、この変化の荒波に耐えた生き残りである。もっとも、我々英語学習者としては、どうせならこれも一緒に消滅してくれた方がありがたかったのだが。

このように、英語に起こった文法面の変化は、大まかに言って、活用形の簡略化であった。しかし語彙面に起こった変化は、これとは全く異なる様相と呈す。英語はフランス語をはじめとする外来語を大量に取り込み、自らの血肉としたのである。その結果、実に多彩な起源の単語が、英語に定着することになった。フランス語の影響でよく知られているのは、食用家畜に関するフランス語と、もともとの英単語の共存である。牛や豚、羊といった家畜は生きている間は被支配者の英語話者によって世話されるから、英語で cow, pig, sheep と呼ばれる。しかしその肉が調理されて食卓に並べられると、それを食するのは支配者であるフランス語話者なのだから、beef, pork, mutton とフランス語で呼ばれることになる。フランス語の言葉を積極的に取り入れた分野には、貴族のスポーツである鷹狩り (falconry) もあげられよう。hawk はゲルマン語に由来するが、falcon はフランス語から英語に持ち込まれた語である。Quarry (獲物), leash (革ひも) もフランス語から借用され、英語に定着した鷹狩りに関連する用語である。

このように英語に定着した外来語は、Bragg (2004) も指摘するように、英語を豊かに彩る語彙体系という遺産を英語にもたらした。たとえば sin (ゲルマン語由来) と crime (フランス語由来) は、日本語では同じ「罪」と訳されようが、前者は道徳的な「罪」、後者は法律上の「罪」を指す。中世では、法体系は支配者の手中にあるものだから、法律上の違反を表す crime が支配者の母語から採用されたことは何ら不思議ではない。walk (ゲルマン語由来) と march (フランス語由来), stool (ゲルマン語由来) と chair (フランス語由来), ask (ゲルマン語由来) と question あるいは demand (フランス語由来)

など、英語土着の語とフランス語由（ラテン語等からフランス語を経て英語に入ったケースも含む）の語が、微妙に異なる意味合いで共存している例は、他にも数多くある。語源の話に興味を持ったのであれば、渡部（1977）を読むとよい。身近な単語の語源を探りながら、西洋文化の背景を読み解いてみせるこの本は、英語の勉強があまり好きではない人でも、楽しく読めるだろう。

フランス語由来の言葉との共存に失敗し、英語から追い出された言葉ももちろんある。たとえばフランス語由来の *suffer* は、英語土着の語 *þolian / browian*（*b* は [ð] あるいは [θ] の音価を表す文字）を追い出してしまった。余談ながら、この *suffer* という動詞は、日本語を母語とする英語学習者がよく間違える動詞の一つなので、注意が必要である。下記英文は日本語を母語とする医学研究者の手によるものだが、どのように英語を手直しすべきか分かるだろうか。

Case 6 was suffered from stranguria and showed signs of severe pain.

（木下 1992: 92）

正解は “Case 6 suffered from strangury（症例 6 は、有痛排尿困難に苦しめられていた）.” である。なぜこのような間違いを犯すのかは、日英語対照言語学を学ぶとよく分かる。興味があれば、安西（2000）等を読んでみてほしい。

フランス語の影響は、接辞にも及んでいる（寺島 2008: 68）。否定を表す接頭辞 *in-*（およびその変異形 *im-*, *ir-*, *il-*）は、フランス語あるいはラテン語由来の *indirect*（間接的な）や *impatience*（せっかち）、*irregular*（不規則な）、*illiterate*（非識字の）などの借用語とともに英語に入ってきた。

フランス語に抑圧されながらも、耐える英語。そんな英語を、運命の女神は見捨ててはいなかった。英語が再び日の目を見る時がやってくる。ただ、英語が再び公の場に姿を現したとき — 1362 年、英語は実に約 300 年ぶりに議会における公認言語として返り咲いた — それは、上記で述べたような変化を経て、アルフレッド大王の時代の言語とは、かなり異なったものになっていた。

3. 復権への道

英語の復権を後押しした要因には、政治的なものもあれば、社会的・文化的なものもある。そのすべてを限られた紙幅で述べることは無理だが、この小冊子ではよく知られている3つの点にしばって、簡単に見ておこう。

まず、英語復権の後押しをした政治的要因を見てみよう。イングランドにおける英語再浮上のきっかけを作ったのは、何といてもジョン王（1167年-1216年）である。この王は、その父王ヘンリー2世（Henry II）の晩年を描いた舞台劇『冬のライオン（The Lion in Winter）』でも、実兄ジェフリーに以下のように嫌味を言われる場面があるほど、無能であった。

If you're a prince, there's hope for every ape in Africa.

(James Goldman, *The Lion in Winter*, II, ii)

お前が王子だというなら、アフリカのサルにも望みがあるな。

ジョン王の無能ぶりは、フランス国内の先祖代々の領地を次々に失うという、画期的な政治的結末を生みだした。しかしこの愚王ぶりが、かえって英語を救うことになった。フランス国内の領地を失った王侯貴族たちは、イングランド国内の自領地にとどまるしかないわけで、こうなるとフランス語は母語として習得される言語というよりは、わざわざ外国語として学習される言語になっていく。イングランドにおけるフランス語凋落の始まりである。

次に、社会的要因を見てみよう。往々にして人の運命には、意外なものが影響を与えるものだ。英語の運命もその例にもれない。英語の復権に貢献した意外な社会的出来事、それはなんと伝染病の大流行であった。14世紀半ばにヨーロッパを蹂躪した黒死病（ペスト）は、イングランドでも大変な猛威を振るい、多くの人々が犠牲になったが、その結果は意外なものであった。急激に人口が減少したため、下働きをする被支配者層の人口が減り、生き残った者たちの労働力の価値が、伝染病流行以前よりも上がったのである。言語学的に言えば、ある言語の価値は、それを話す者たちの経済的力に比するわけではない。しかし現実世界では、言語間の社会的地位争いの行方を決するのは、その話者たちの持つ経済力である。英語話者である被支配者層の経済力の向上は、彼らの話

す言語の地位向上につながった。

最後に文化的要因を見ておこう。14世紀半ば、ロンドンの豊かな商人の家に、一人の男児が生まれた。この男児こそ、後に「英詩の父 (The father of English poetry)」と呼ばれることになる詩人、ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer, 1343年?-1400年) である。フランス語・ラテン語社会に身を置きながら、チョーサーはあえて英語で著作活動を行った。チョーサーの英語は、アルフレッド大王の時代の英語と比べると、格段に現代英語に近づいており、さして英語史の知識がなくとも、現代英語訳を原文の横に並べ、さらに専用の用語辞典 (glossary) を駆使すれば、何とか読める。17世紀の英国詩人ジョン・ドライデン (John Dryden) に、“here’s God’s plenty ([才能が]人間の域を超えるほどにある)” と言わしめた代表作 『カンタベリー物語 (The Canterbury Tales)』をはじめとする彼の優れた作品は、英語の地位を大いに高めることになった。

かくして英語は、徐々に復権への道を歩んでいった。チョーサーと時代は異なるが、同じように、文学の力で英語の名声を高めたウィリアム・シェイクスピアによる 『ジュリアス・シーザー (Julius Caesar)』 には、シーザー暗殺の成功に興奮した首謀者の一人キャシアスが、次のように叫ぶ場面がある。

How many ages hence / Shall this our lofty scene be acted over / In
[states] unborn and accents yet unknown!

(William Shakespeare, *Julius Caesar*, III, i, 111-113)

千載ののちまでも / 我々のこの壮烈な場面は繰り返し演じられるだろう、
/ いまだ生まれぬ国々において、いまだ知られざる国語によって

(小田島雄二 (訳))

ノルマン征服を境に被支配層に落とされた当時のイングランド人が、今の英語の繁栄をみれば、感動のあまりこう叫ぶに違いない。「我々のこの堂々たる言語は、千載ののちまでも話されよう、いまだ生まれぬ国々において、いまだ知られざる国語を母語とする者によって」と。一旦は衰退と絶滅の危機に追いやられた弱小言語が世界の覇権を握るとは、誰が想像しえただろうか。

4. さいごに

思考の土台になるのは母語の力であり、まずは母語がしっかりしていなくては、話にならない。しかも、英語に限らず外国語、とりわけ語彙・文法ともに母語とは似ても似つかぬ言語を習得するには、大変な時間と労力がかかる。外国語の習得に励んでいる最中であっても、できればその労力を別の事柄に向けたいと、ふと思うこともある。

しかし外国語を知ることは、人生を生きる上で、間違いなく大きな力になってくれる。この小冊子では、英語の波乱万丈の冒険記の一部を見たに過ぎないが、あなたが学んでいるのが英語であれ、他の外国語であれ、母語に加えてもう一つの言語を知り、それを使って新たな世界を覗こうとするとき、そのときこそ、あなた自身の冒険物語が、幕を開けるのだ。

引用文献

Bragg, Melvyn (2004) *The Adventure of English: The Biography of a Language*, Sceptre.

安西徹雄 (2000) 『英語の発想』 筑摩書房.

大木俊夫 (1992) 「英語受け身文の誤文分析」『浜松医科大学紀要(一般教養)』第6号, 91-100.

寺澤盾 (2008) 『英語の歴史—過去から未来への物語』 中央公論新社.

渡部昇一 (1977) 『英語の語源』 講談社.

引用作品

Evans, G. Blakemore (ed.) (1974) *The Riverside Shakespeare*, Houghton Mifflin.

Follett, Ken (1989) *The Pillars of the Earth*, Reprint, HarperCollins, 2007.

Goldman, James (1966) *The Lion in Winter*, Samuel French.

小田島雄志(訳) (1986) 『シェイクスピア全集Ⅲ』 白水社.

米倉 よう子 (Yonekura Yoko)

2002年 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得
退学（文学修士）。

2002年 日本学術振興会特別研究員(PD)。

2005年 奈良教育大学助教授。

2007年 同准教授。



【研究テーマ】

言語が変化する際の方向性やメカニズムを研究しています。特に、人間の認知能力と意味・構文の変化がどのように関係しているのかが焦点となる、「文法化 (grammaticalization)」・「(間)主観化 ((inter)subjectification)」・「構文化 (constructionalization)」という現象に興味があります。

【趣味】 自分の研究に関係ない本を読むこと

【好きな小説】 宮尾登美子『きのね』

【高校生のときに読んだ本】 渡部昇一 『英語の語源』（引用文献を参照のこと）

[英語の冒険] — [言語の命運] —

著者 よねくら 米倉 よう子

2018年3月31日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9135 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>